

体育科部会 「試案の理解を一層深めるための資料」

令和2年度 体育科部会研究計画作成試案

主題設定について

教科の特性を重要視し、運動領域では、「動きを高める」という言葉が加わりました。両領域とも、仲間と共に学ぶことは大前提であるという認識から、その文言は削除しました。

研究のポイントについて

これまで、研究のポイントとして大切にしてきた「何を学ぶのか(学習内容)」と「どのように学ぶのか(学習方法)」に加え、これからは、「何が身に付いたか(学習成果)」も明確にして研究を進めていく必要があると考え、①授業づくり、②学習過程、③振り返り活動に関する3つのポイントを設定しました。

「豊かさ」について

教師は、子供が、体育の見方・考え方を働かせたり、豊かにしたりできるように手立てを講じると共に、子供が、誰とでも運動やスポーツの多様な楽しみ方や関わり方を共有できるよう、共生の視点を踏まえた指導内容を考えていくことが大切です。そのことが生涯にわたってのスポーツライフの「豊かさ」につながると考えます。

1 研究主題

豊かに運動に取り組み、動きを高める子供の育成(運動領域)
健康で安全な生活に関心をもち、主体的に実践しようとする子供の育成(保健領域)

2 研究主題設定の理由

(1) 研究の歩みと今後の方向性

一昨年度より、新学習指導要領に記載されている体育科の目標である「心と体を一体として捉え、生涯にわたって健康を保ち運動し、豊かなスポーツライフを実現する」ことの重要性を再認識し、「豊かさ」をキーワードに研究を進めてきた。そして、体育科で育成すべき資質・能力を身に付けるために、指導内容と指導方法の明確化に焦点を当て授業改善に取り組んだ。昨年度の研究から必次のような成果と課題が見られた。

- ・指導内容を明確にすることで、単元終了の子供の姿を具体的に想定することができた。また、指導内容と子供の実態とを照らし合わせながら単元を構想することで、どの子供も身に付けるべき技能を高めることができるモデルステップの観照設定を行ったり、運動が苦手な子供への支援についても具体的な手立てを考えたりすることができた。
- ・子供の思いや願いを教師が捉え、授業の「振り返り」から必要感のある「計画」を立て「実行」することができた。今後も、単元中も子供の実態を真摯に捉え、単元のねらいとの整合性を図る必要がある。
- ・単元開始時点での子供の運動能力で楽しむことができる導入を工夫することで、運動への興味や憧れが生まれ、子供は「やってみよう」「自分にもできそうだ」などと運動への意欲を高めた。また、仲間と課題を解決する場面を意図的に設定することで、積極的にコミュニケーションを図りながら主体的に運動に取り組むことができた。これらの意欲や主体性を維持したまま、運動や仲間と関わり続けるには、習得した知識や技能を活用し、探究的に活動できるような学習過程が必要となる。
- ・自分だけでなく、仲間や家族の健康についても関心をもち、より実生活と関連付けて健康や安全について理解を深めることができた。窮陥に理解するための手立てを今後も考えていく必要がある。今年度の研究のポイントは、上記の成果と課題を踏まえ、以下の三点とした。

- 子供の思いや願いを想定し、習得・活用・探究の見通しがある授業づくり
- 子供自らが体育の見方・考え方を働かせ、課題解決を図ることのできる学習過程
- 子供が自分の変化や高まりを実感し、自ら次の活動に進んでいくことができる振り返り活動

(2) 主題について

① 「豊かに運動に取り組む」とは

豊かに運動に取り組むとは、体育の見方・考え方を働かせながら、運動に関わったり、運動を共にする仲間や、運動する自分自身と関わりながら、運動の楽しさや喜びを味わうことである。そうすることが、体育科で身に付けるべき資質・能力を育成していくことにつながる。と考える。

体育の見方・考え方を働かせるとは、運動を「すること」だけでなく、「あること」「支えること」「仰ること」など、自己の選択等に応じて、運動との多様な関わり方について考えることである。子供は、運動との関わり、また、仲間や自分自身との関わりを通して、この体育の見方・考え方を働かせたり、更に豊かなものしたりしていく。また、運動の楽しさや喜びは「目標としていた動きができた」「試合で勝つことができた」といふ学習の成果や、ゲームの醍醐味といった「運動しての結果」だけに生まれるのではない。「OOができるようになった」という願いをもって運動に取り組み、その願いを叶えるために身体をかけた活動や挑戦する過程にも、体育科からこそ味わうことができる運動の楽しさや喜びがあることを子供に気付かせたい。

② 「動きを高める」とは

動きを高めるとは、新たな動きができるようになることを意味する。目標としている動きが“できた”ときの楽しさや喜びは、子供にとって特別なものである。そして、この楽しさや喜びこそが、体育科の特性の要であり、子供が本気になることで運動に関わり続ける原動力となる。但し、体育科の学習では、ただ動きが高まればよいということではない。運動や仲間、そして自分自身と十分に関わりながら、豊かに運動に取り組んだプロセスが「動きが高まった」という結果に結びつくよう指導・支援を行うことが重要となる。

③ 「健康で安全な生活に関心をもち、主体的に実践しようとする」とは

子供が自らの生活を見つめ直し、望ましい生活習慣の形成や心身のよりよい成長を願い、積極的に実践しようとする姿を求めたい。保健領域においては、自らの健康課題を科学的な観点から捉え直し、知識を得るだけではなく、自らの生活や発見と関連付けて実態的に理解するという一連の思考過程を大切にしながら学ぶ必要がある。習得の知識と折し知識が自分の課題と関連付けられれば役立つことによって、社会の中で生きて働く知識となる。それこそが保健の「見方・考え方」を働かせて考えることといえる。ここでは、自己の健康や生活習慣や健康に関する学習内容を明確化するとともに、運動領域との一層の関連を図った学習を目指す。

3 研究内容

(1) 子供の思いや願いを想定し、習得・活用・探究の見通しがある授業づくり

子供がどのような思いや願いをもって運動に取り組もうとしているのかを捉え、運動の特性や達成性を踏まえ見通しをもった授業づくりをしていくことが大切である。その際、子供が動きをどのように習得・活用・探究していくかを想定することが重要となる。習得・活用・探究は、単元全体はもちろん1時間の授業の中でも起こりうる学習過程である。特に活用・探究の場面において動きの高まりや運動の楽しさを広げたいとする姿が生まれ、その過程において深い学びが実現されると考える。

① 指導内容の焦点化を図ったカリキュラム・マネジメント

体育科では、学習指導要領に目標と内容が2学年まで示されていることから、子供の発達段階や運動の系統性、各運動領域の関連性などを考慮し、各学年における指導内容を焦点化することが必要である。また、体育・健康に関する指導につながる健康安全・体育の行事や体育祭等との関連を踏まえながら、自己の運動や健康に関する課題を見付け、よりよく解決していく深い学びが実現できるようにする。

② どの子供にとっても学びが広がる授業づくり

ア 学習のねらいの明確化

運動を構成している要素を教師が十分に分析して運動の特性を捉え、単元や1時間の授業において、どんなことを身に付けさせたいのか、どのように教わりたいのか、といった学習のねらいを明確にして授業を構成する。そして、活用・探究の学びが充実するよう、経験や既習を活用したり、子供自ら活用する場を意図的に仕組んだりすることも重要である。

イ 子供の学習意欲を喚起する教材提示の工夫

運動の出発点は大切である。単元開始時点での子供の運動能力でも、これからは行う運動のイメージを膨らませ、「楽しそう、やってみよう!」「ほくにもできそうだ!」と思えるよう、出だし方を工夫する。また、子供が意欲を見通しをもって運動に取り組めるよう、子供の実態に合わせで振りやボールを変えられるようにするなど、柔軟に柔軟性をもちたい。



動きの高まりについて

体育科の“教科特性”を「動きの高まり」と置きました。体育科の見方・考え方を働かせながら動きを高めていく、そのプロセスが重要になると考えています。

運動領域との関連について

指導要領で示されている、「体づくり運動」と「保健」との関連付けを契機に、心身の健康の保持増進、回復に関して、両者の更なる相互の関連を目指していきたいと考えています。

習得・活用・探究について

体育科で求められる資質・能力を育成するためには、「カリキュラム・マネジメント」及び「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が必須です。そのためにも「習得・活用・探究の見通しがある授業づくり」、特に「活用・探究」場面の見通しを教師が持っていることが重要だと考えます。

「習得・活用・探究」は、1時間の授業の中でも生まれるサイクルですが、まずは単元構想の段階で、このサイクルを意識することが大切だと考えます。

※「習得・活用・探究の見通し」については、H28 教育課程部会小学校部会資料5(文科省)を参考にしました。

体育の見方・考え方について

体育の見方・考え方を働かせながらいろいろな活動に取り組みめるようにすることも大切ですが、教師が、そういった多様な活動を通して課題解決に取り組んでいる子供の姿をしっかりと見取ることも大切です。教師が、そういった子供の姿を価値付けたり、称賛したりしていくことを継続していくことが、体育科で身に付けるべき資質・能力を育成していくためには重要だと考えます。

主体的な課題解決について

運動(教材)と十分に関わった子供は、その過程の中で生まれた問いの解決に向けて、仲間との関りを求め始めます。そして、仲間と十分に関わりをもった後は、再度、運動(教材)への関りを求め、自ら課題解決を図っていくと考えます。そういったことを踏まえて、運動(教材)との関わり方、仲間との関わり方を研究内容に盛り込みました。

「振り返り活動」について

これまでは、PDCAサイクルの「Check」を「振り返り」として授業の終末を基本に設定してきましたが、今年度は「Check」→「Action」→「Plan」までの過程を振り返り活動とし、子供が自ら次の活動に進んでいくための重要な学習過程として位置付けました。

① 子供自身が体育の見方・考え方を働かせ、課題解決を図ることのできる学習過程

体育の見方・考え方を授業中の活動で表す、「すること」…動きを説く・発表する、「見ること」…手本を見る、動きを見比べる、「支えること」…友達を補助する・アドバイスする・励ます、「知ること」…自分の知識を得る・仲間の思いを知る、などである。このような活動を通して、課題解決を図っていく学習過程を大切にしたい。

① 仲間「関わり」が生まれるための、教師が学習課題設定の工夫

子供が自ら思考を働かせるためには、「関わり」が必要である。体育科における「関わり」とは、運動への傾きや憧れと表裏一体のものである。そして、子供が「できるようにになりたい」「○○さんみたいにやってみよう」と運動への傾きや憧れをもち表わすことで運動に関わるためには、運動中や話し合いの中での教師の関わりや学習課題の設定の仕方が重要になる。子供が関わりをもち、仲間と共にその解決に向けて取り組むためにも、教師の関わりを工夫したい。そして、単元の途中も子供の思いをしっかりと捉えた上で、子供の関わりと関連性のある学習課題を設定することが大切である。

② 運動(教材)との関わりを生みだすための手立て

ア 運動に関わり親しみながら、基本的な技能を習得できる場を設定

子供が運動に関わり親しみながら、基本的な技能を習得していきながら手立てを講じる。その際、運動への意欲を維持できるよう、子供の思いに合わせて身に付けるべき運動技能が難易度を少しずつ高めていくことも大切になる。こうした難易度の関わり親しみが、既習の活用・探究を支える基となる。

イ 活動を自己選択できるスモールステップの練習場の設定

主体的に活動に取り組むため、子供の思いに合わせてスモールステップでの練習方法の提示と見の設定を行う。また、その練習の過程でつまづいたときに、そのつまづきに対応した練習方法と練習の場を用意しておく。そうすることで、子供は自分の能力に合わせ、見通しをもった練習方法を選び、安心して練習から運動に取り組むことができる。

③ 仲間との関わりを生むための手立て

主体的・能動的に深い学びを体育科で実現していくためにも、仲間と共に課題解決を図る学習過程はとても重要である。仲間との関わりが必要になる学習時や、子供自ら仲間との関わりを求める場等を教師は事前に想定しておくことが大切である。

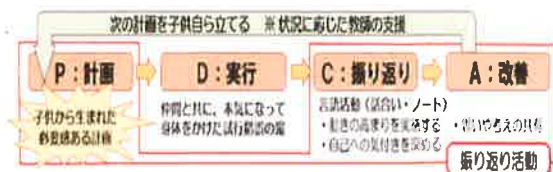
ア ペアやグループで解決する課題の設定

領域によっては、一人一人が自分の課題に応じた練習方法で課題解決を図る場面が多い運動もある。しかし、そういった頻頻であっても練習方法や対面練習の仕方を工夫することで、ペアやグループで解決できない課題を設定することができる。それらの活動が子供にとって必要のあるものであれば、子供は自ら課題解決のために仲間との関わりを求めていく。

イ ICT機器を活用して自分の考えを表現する場の設定

自分の考えの図表化、動画や写真を使って説明することは、「思考力、判断力、表現力等」の育成にも効果的である。ICT機器で互いの考えを共有したり、撮影した動画や写真をペアやグループで見合ったりする場面では、動きの撮影等のインプットに留まらず、思ったことや考えたことを伝え合うなど、アウトプットに向けた活用が仕方を工夫する。

③ 子供が自分の変容や高まりを実感し、自ら次の活動に進んでいくことができる振り返り活動



子供の「先生、今日はこんなことに挑戦したい!」「チームでこんな練習をしたい!」という声で始まる授業にしたい。そのためにも、子供がしっかりと自分自身の変容や実感できる振り返り活動(C:振り返り)→「A:改善」→「P:計画」に重点を置きながら、PDCAサイクルの充実を図る。

① 主体的な振り返り活動にするための手立て

体育科の学習では、活動を振り返りながら自己を見つめる機会が多様にある。単元や授業開始時における目指す自分の姿を明確にした上で、達成状況や自分の変容を振り返る活動を大切にしたい。



い。そして、子供が「何を聞いて」「何を振り返るか」を理解し、主体的にこの振り返り活動を行えるようにしていきたい。そのためにも、教師は子供の思いに応じ、多様な材料の中から何を振り返り活動に生かすのか考え、言語活動等を行う必要がある。このような有意義な振り返りを繰り返すことで、子供は、問題に応じて自ら振り返りの材料を整理し、主体的に次の課題を見出すようになる。発達段階や一人一人の思いを考慮しながら、指導・支援していく必要がある。

② 自分の変容や高まりを実感するための手立て

ア 客観的かつ信頼を用いた自己評価

子供は、自分の変容や動きの高まりをより正確に評価するためには、客観的かつ信頼が必要となる。ビデオやタブレットを有効に活用し、練習前後の動きや手本の動きと自分の動きを比較したり、動きのチェックポイントを決め、仲間をチェックしてもらったりする。また、ゲーム観察等では、パスやシュートの回数を集めたり、コート上に落球ポイントを記入したりしてゲーム分析を行うなど、一人一人の動き方を評価する材料として活用する。

イ 思いや考えを共有する話し合い活動

「仲間とこんなふうにかやったら上手くなったよ!」「○○がうまくいかないな。頑張っているのどうだろうか?」といった子供の喜びや悩み、仲間への思いや自分の中での葛藤といった気持ちを共有することは、体育の見方・考え方を広げたり、深めたりする契機となる。教師は、子供の気持ちをただ聞きながらだけでなく、発言の背景を問ったり、その発言に対する仲間の思いを聞き合ったりしながら話し合いを進めることが大切である。そうすることで子供は、運動に対する思いをもち、自分の考えに自信をもち、課題解決の視点を明確にしたりしながら、自ら次の活動に進んでいくことができる。

ウ 自己の変容を自覚できる体育カード等の工夫

自分自身のことを深く理解していくことは、見通しをもって自ら次の活動に進んでいくために重要である。運動との関わり、仲間との関わりを通して自分はどうに変容してきたのかを体育カード等を活用してじっくりと振り返る場を設ける。その際、学習前後での動きの高まりだけでなく、気持ちの変容にも気付くことのできる体育カード等の工夫が必要である。そして、教師の指導や仲間の声かけ等を通して、子供が自己の変容を自覚できるようにしていく。

主体性について

運動領域においては、「学びに向かう力、人間性等」についての指導内容が例示されています。「知識及び技能」「思考・判断・表現」と同様に、各単元の目標や指導内容に対応して適切に評価していく必要があります。尚、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、1時間毎の画一的な評価ではなく、単元を通して見取っていく必要があります。「主体的な振り返り活動」においても、同様の見取りが重要になると考えます。

振り返り活動

自己の変容を認識したりする活動(メタ認知)は、次時への意欲付けや、学びの連続性にもつながります。教師は、授業の終盤に限らず、自他の活動を振り返る時間をしっかりと確保すること、また、振り返りの視点や振り返りで使用する客観的な材料を準備しておく必要があると考えます。

子供が、自分の成長の喜びを実感することができれば、PDCAサイクルがより活性化され、次の活動に進んでいくための大きな推進力となると考えます。

